

彼も白い飯を食べたいと言いながら私の隣で死んでいった。

割合に早く昭和二十二年十月二十二日故郷の米子に帰った。五歳くらいの子が一人で玄関で遊んでいたが、私の姿を見ると、おじいちゃん兵隊さん来たたと家の中へ走り込んだ。

私の家内は昭和二十年暮れ私がシベリヤに着いたころ、生きて帰らないだろうと三歳の長男を置いて他家（酒場の女将）へ嫁ぎもう子供もできていた。

## 抑留生活の体験

石川県 中川 政義

昭和二十年八月十三日、私は新京にある経理学校から原隊復帰を命ぜられ、その帰途豆満江河沿いの道路でソ連将校の乗ったトラックに出会った。生まれて初めて見るロシア人。絶望と恐怖感で生きた心地がしなかった。どこかへ連れられていくのか、そして殺されるのだろうか

と覚悟を決めたとき、ふと浮かんだのは母の姿だった。

間もなく間島の収容所に運ばれた。そこから日本に帰れるのだというデマに勇気づけられながら、二百キロに及ぶ徒歩行軍と八日間の天幕生活を余儀なくされた。しかし、自分たちの希望とは全く逆の方向に、北へ北へと貨車輸送され、コムソモリスク地区の収容所に到着したのである。そこでは主に建設作業を中心に穴掘り、コンクリート打ちにれんが積み、大工作業と、どれをとっても不なれな仕事ばかり、厳寒と休みなしの労働に疲労こんぱいに達した。一方食事は作業成績によって四等分されていた。すなわち、作業パーセント八〇%未満が一級食、一〇〇%未満は二級食、一二五%未満は三級食、一二五%以上が四級食になっている。各級食ごとのパン、穀類、野菜、肉、バター、砂糖などの定量に記憶はないが、二級食においてはたしかパン二百グラム、穀類二百五十グラムの少量で、一日二千四百カロリーは摂取されていないかと思う。

私の収容所では終戦の年から翌年にかけて回帰熱という伝染病が蔓延し、一時は遺体の収容と墓場の穴掘りが

日課だった。回帰熱というのはその土地のロシア人が感染源だといわれ、シラミが原因で急激に熱が高くなつて、食事は一切受け付けなくなり、顔色が黄色味を帯び、下痢を伴って死亡してしまふのである。朝の点呼に出なければもう死んだかと思われたくらいの悲惨さ。毎日死者が出始めると、ついには人手不足のため、道路向かい側の倉庫に二百人ほどの遺体を積み上げ、埋葬されるまで放置されていたのである。連日、墓場の穴掘り作業に明け暮れていたころ、私自身が回帰熱にかかつてしまった。頭が重く気分は悪く、体温は四十度以上に上昇しており、絶対安静ということで入院した。しかし、医薬品も不足しており熱を下げる特效薬とて全くなかった。高熱が十日以上も続いた後、設備のよい別の病院へ移送され、手厚い看護を受けるとともに特別の病人食が与えられた。

このような手厚い看護と栄養食に恵まれて、猛威をふるっていた回帰熱を無事克服。二か月後に退院できた私はコルホーズ（集団農場）作業と託児所の植木作業に従事した。体力の回復とともに元の建築作業に回されることもあった。ちょうどそのころ、生産競争が一次、二次

と日を追って高まり、赤旗争奪戦へと作業成績の向上に狩り立てる労働を強いられた。そして、所内ではオルグ活動、つまり生命を保護してくれたソ連側の行為に対し、恥ずかしくない行動をとっているか、作業能率を妨害しようとする者はいないか、反動的な者がいないかと、徹底的に監視、調査されることになった。

当時、発刊された日本新聞によると、二十二年四月ごろから順次ナホトカ經由で送還が開始されているということであったが、果たして順調に進んでいるのだろうか。日本側が積極的に船をよこさないという説もある。

ナホトカに集結した日本人は再び他の地域へ転送されているともいわれた。予想どおり送還命令を受け、ナホトカに集結した私は、もう一度他の地域で労務に服さなければならなかった。この収容所を離れ、二キロの徒歩後、波止場に着いたとき、私たちを待っているのは日本船ではなく、ソ連船であった。約十二時間の航海後たどり着いたのはシベリアの門戸、交通上、軍事上の要地として知られるウラジオストツク市である。

ウラジオ港は波ひとつない静けさで、美しく、護岸工

事も行き届いているが、市内の道路が非常に悪く、電車の舗装も壊れ、交通の妨げになっていた。従って私たちの作業もこのような道路の補修や水道工事、街の美化清掃が主であった。幸いウラジオ市民はシベリア奥地で働くロシア人と違い、人種的な偏見はなく、教養、性格面において相当の差異が認められた。

約一か月たってようやく帰国できることになり、帰還者全員が収容所前に集合、ウラジオ市長よりあふれるばかりの激励を受けたとき、これまでの苦痛はすっ飛んで、ソ同盟万歳と拍手を送らずにはいられなかった。

昭和二十二年十一月十四日十七時三十分、舞鶴から私を乗せた列車がしずしずと金沢駅に到着、四年ぶりに母と対面できた記念すべき時刻であったのである。

最後に遠くシベリアの土地に身を埋め、あわれ永遠帰らぬ幾多の同胞に対し、心から哀悼の意を捧げ、このささやかな記録を閉じる。

## 悪夢

栃木県 黒川 護

シベリアに強制的に連行された我々を待ち受けていたのは、かつて想像もしていなかった寒気と、一方的に押しつけられた強制重労働であった。送られた場所が一体どの辺なのか。ハバロフスクまでは大体わかっていたが、その先はさっぱり未知の世界であった。

でも、昭和二十年の十一月に入ソし、翌年の雪が消え一面が緑におおわれ、名も知らぬ花が咲き出すころになって、現在地がどの辺か大体わかってきた。つまり、ハバロフスクから約二百キロくらい北上したところの街がコムソモリスク（我々はここで汽車よりおりて、そこから自動車に乗せられて北上）で、ここを起点として、シベリアのど真ん中を北西に向かって走り、バイカル湖の北辺を通って、やがてシベリア鉄道と連結する。こういう鉄道をつくるためにここに連れてこられたわけであ